

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

京都から鎌倉に集う人びと

―武士政権を読みなおす―

岩 田 慎 平

一 頼朝時代の鎌倉幕府吏僚の特徴

治承三年（一一七九）十一月、平清盛が福原から軍勢を率いて京都を制圧した。後白河院政を停止し、反平家の貴族らが多数処罰され、平家政権の成立の画期とされるこの事件は、治承三年政変と呼ばれる。平家は強大な軍事力を背景として政権奪取に成功したが、関白・松殿基房の配流に反発する藤原氏の氏寺・興福寺や、後白河院とのつながりがとくに深い園城寺など、畿内の権門寺院から大きな反発を招いたほか、このとき新たに平家知行国となった国では、新任国司（平家方）と国内武士の対立が惹起された。

たとえば関東では、上総・相模の有力在庁である上総広常・三浦義明が平家家人から圧迫を受けることとなった。このことは、彼らが源頼朝の拳兵に積極的に協力する前提となる。

平家はさらに、八条院暲子内親王の猶子となっていた以仁王に対する圧迫も強めた。この結果、治承四年（一一八〇）四月、安徳天皇の即位によって皇位の望みも絶たれた以仁王は、武力による平家打倒と皇位篡奪を企図し、八条院所縁の武士（源頼政ら）を率いて挙兵した。この挙兵は直後に発覚して鎮圧されるが、戦乱は全国に拡大していった。また、このとき戦死した源頼政から平時忠に知行が移った伊豆国においては、新任の目代（山木兼隆）と旧来の在庁官人（北条氏ら）が対立することとなった。これが源頼朝挙兵の直接的な契機となる（元木二〇一二）。

このように、皇統をめぐる争いと地方におけるその影響が頼朝挙兵の前提を成していたわけだが、そもそも、頼朝の父・義朝は後白河院近臣として台頭し、頼朝自身はその嫡子という関係にあった（元木二〇一二）。すなわち、頼朝は当初より後白河院に近い立場から挙兵したのであり、その樹立した政権もまた後白河院と親和性の高い政権であったといえるのである。

このような頼朝とその政権を支えた吏僚たちの特徴とは、いかなるものであったのだろうか。

挙兵から坂東の制圧を経て、「寿永二年十月宣言」による頼朝の復位と東国支配権の公認が画期となり、それまでは流人・降人など挙兵当初から頼朝周辺に集っていた人々が支えていた組織も整備が進んだ（目崎一九七四）。「さまざまな公武交渉にともなつて、畿内周辺の諸権門（朝廷のほか貴族、寺社など）との折衝も必要になり、そこで有効な人脈を持つ要員が求められたのである。それは必然的に京都出身者ということとなり、以後頼朝は計画的に京都から吏僚を招致していった。

「寿永二年十月宣言」以降に活躍した吏僚たちのなかで代表的なのは大江広元・三善康信・二階堂行政らであった。彼らの特徴としては、頼朝の乳母・姻戚の関係者であり、後白河院近臣である藤原光能の縁者に集約され、そ

してそれらはいずれも後白河院の所縁に連なるというものである（野口一九八九）。このような構成は、父・義朝が後白河院近臣であり、頼朝はその嫡子であったことを反映しており、政権の性格も大きく規定するものであったといえよう。

二 橘公業

元暦元年（一一八四）、関東に下向した平頼盛を饗応する幕府御家人たちのなかに橘公長きんながが名を連ねている（『吾妻鏡』元暦元年（一一八四）六月一日条）。彼らは「馴京都之輩」であったために選抜されたというのだが、この橘氏の出自について考えてみたい。

橘公長の息子・公業きんなりは、平家追討戦において讃岐国屋島の平家を包囲するため、まず「先陣」として讃岐国に入り、「住人等」を鎌倉軍に引き入れるよう工作している。彼の地で鎌倉方に味方する人々の「交名」を頼朝に取り次ぎ、幕府御家人としての認定を仲介した。その後「彼国住人」らは「公業下知」に随うよう頼朝から命じられている（『吾妻鏡』元暦元年（一一八四）九月十九日条）。

橘公業がこのような役割を命じられたのは、父祖以来讃岐国と密接な関係を持ち続けてきたからだと思われるのである。すなわち、「水主神社大般若経函底書」には、公長・公業の父祖とみられる橘氏が、数代にわたって讃岐国の目代を務めていたことが記されている（『香川県史 第八巻 資料編古代・中世史料』、野中一九九〇、岩田二〇一〇）。公長・公業以前から、橘氏は讃岐国の国衙に目代として一定の所縁を有しており、それを活かして公業は讃岐国内で在地勢力の誘引工作を進めたとみられる。

橘氏が目代として仕えた国守のなかには、後白河院近臣の藤原季能も含まれている。このことから、国守―目代の関係を通じて橘氏は後白河院周辺にも連なっていたことがわかるが、橘公長自身も後白河院近臣であった（『後白河院北面歴名』、小松一九八九）。

また、公業が誘引工作を進めた同じ時期に、頼朝の姉妹の婿である一条能保が京都の朝廷から讃岐守に任ぜられている（『吾妻鏡』元暦元年六月二十日条）。この一条能保もまた、頼朝とともに後白河院に連なる人物である（佐伯二〇〇六）。

すなわち、屋島の平家を包囲するため、公業は讃岐国衙との所縁を通じて、一条能保は讃岐守という立場から、それぞれ後白河院周辺に連なる人物が幕府方として讃岐国在地勢力を組織するために配置されていたことが見て取れるのである。

この橘氏は、ほかのいくらかの御家人と同様に、内乱以前は平家に仕えていた。しかし加々美長清との「一所傍輩之好」を頼つて幕府に属すと、このような活躍をみせるようになったのである（『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）十二月十九日条）。幼少の頃から在京経験が豊富で、故実に通じていたとされる幕府御家人・橘公業の出身は、関東ではなく京都とその周辺にあった（『吾妻鏡』建久六年（一一九五）三月四日条）。橘氏は、京宅を拠点としながら受領郎等や目代などとして活動する、院政期に特有な武士のあり方を示していたといえよう。京都の事情によく通じており、武芸などの故実に通じた御家人として、成立当初の鎌倉幕府における様々な儀式や行事で重要な役割を果たしたのである。

三 源仲章と源光行

(i)

源仲章なかあきとと源光行みつゆきは、幕府に祇候しながら、いずれも後白河院および後鳥羽院の近習でもあった。院近習とは、必ずしも伝統的な院近臣家の出身ではないが、実務能力や芸能の素養などを通じて院と個人的に強く結びつくことにより、破格の昇進を遂げるような者のことをいう（本郷一九八八）。彼らに対する従来の評価は、公武の対立を前提として、幕府が朝廷へ従属し東国政権としての性格を薄める方向へ導くうえでの、いわば朝廷側から幕府に打ち込まれたクサビのような存在であるというものだった（五味二〇〇〇など）。しかし、幕府成立の背景をみてもわかるように、公武関係は対立一辺倒であつたわけではなく、むしろ協調・親和を基調としていた。これを踏まえ、たうえて、彼らの評価も再考する必要がある。

源仲章の父・光遠は、平時忠・建春門院・後白河院に近い立場で平家に仕えていた。はじめ協調関係にあつた平家と後白河院との対立が深くなるにつれて、光遠も後白河院近習としての立場を鮮明にしたようである。その徴証として、光遠は河内守在任中の治承三年（一一七九）十一月と、伊豆守在任中の寿永二年（一一八三）十一月にそれぞれ解官されている。前者は「治承三年政変」で、後者は「木曾義仲のクーデター」であるが、周知のようにいずれも後白河院近臣・近習らが処罰された事件である。光遠はこの両方で解官に遭っていることから、後白河院近習としての立場が明瞭である（岩田二〇一四）。

幕府との関係でいえば、この光遠の伊豆守在任の時期が注目される。始期は明らかではないが、寿永二年（一一

八三)十一月まで在任していることから、短期間ではあるが、この間に坂東を制圧していた頼朝およびその周辺の人々と、伊豆国の国務を通じて何らかの関係を構築していたことが推測されるのである。そして、この関係のなかで光遠の息子である仲章もまた、一定の役割を担っていた可能性も考えられるのである。このことは、拳兵当初から頼朝周辺の人脈が後白河院周辺に収斂するということにも符号するのである。

仲章の任務について、『愚管抄』は「仲章ハ京ニテハ飛脚ノ沙汰ナドシテ有ケリ」(巻六)と触れている。公武の連絡役といったところであろうか。兄弟の仲国・仲兼も幕府に祇候しており、兄弟で在京・在鎌倉を分担しながら朝廷・幕府にそれぞれ仕えていた。仲章は建仁年間頃(一一二〇一〜一一二〇四)から実朝の侍読じよとくも務めており、建保六年(一一一八)には「関東之御拳」により従四位下・文章博士もんじょうはかせとなった。このとき順徳天皇の侍読に任ぜられ、同時に昇殿も許された。すなわち、仲章は幕府での活躍が認められ、朝廷でも登用されたのである。学者として特別な実績があるわけではないが、該博な知識を有することも評価されたのであろう(『明月記』建暦二年(一一二二)九月二十六日条)。

しかし建保七年(一一一九)、実朝の任右大臣拝賀の際に、側近として同行した仲章も殺害されるのである。

(ii)

源光行は清和源氏満政流みつまさ出身で、祖先には白河院・鳥羽院の北面を務め、強訴の防禦などに活躍し有力な京武者であった重時などがある。また、一族には後白河院の北面に祇候し、検非違使を務め、平家の有力家人でもあった季貞などもある。『源平盛衰記』には、光行が「丈尺を取て輪田の松原西の野に、宮城の地を定めける」というように、下級官吏として平家政権に仕えた様子が描かれている(第十七 福原京事)。すなわち、光行の叔父・季貞は武勇でもって、そして光行自身は吏僚的才芸を活かして、それぞれ平家に仕えていた(岩田二〇一四)。

この光行が幕府に仕えるようになったきっかけは、幕府問注所執事となる三善康信の仲介によるものであった。かねてから頼朝が促していた康信の関東下向が実現した際に光行も同道したのだが、このとき、平家に属した父・豊前前司光季に対する許しを請うている（『吾妻鏡』寿永三年（一一八四）四月十四日条）。この請願は聞き入れられることとなり、光行は幕府問注所執事・三善康信の所縁を頼ることで父の生存に寄与したといえる。この光行・康信の間には「一所傍輩之好」のような関係が想定されよう。在京活動中に朝廷や諸権門へ祇候するなかで培った「一所傍輩之好」は、内乱という非常事態において一族を存続させるための重要な要素であった（岩田二〇一〇）。光行は幕府に数少ない諸大夫身分（位階五位以上）を認められており、上位に位置づけられる御家人となった。さまざまな実務を担当する奉行人として活躍した一方で、「後鳥羽院ノ北面ニテ」（『水原抄』）とあるごとく、後鳥羽院近習としての立場も維持していた。

承久の乱が勃発すると、北条義時追討を五畿七道に命ずる宣旨が関東にもたらされた際に、副状を発給したのは光行であった（『吾妻鏡』承久三年（一二二二）五月十九日条）。それを伝える使者が捕縛されたため、幕府にとつて光行の罪科は明らかであったが、鎌倉に祇候していた息子・親行ちかゆきが一条実雅いちじょうまこと（北条義時女婿）を通じて宥免を願ひ出て、光行は処刑を免れることができた（『吾妻鏡』承久三年（一二二二）八月二日条）。

光行は承久の乱後も引きつづき幕府吏僚として活躍し、とりわけ、子の親行らとともに『源氏物語』（河内本）の校訂などの文芸活動を展開した（織田二〇一一）。

おわりに

鎌倉幕府の組織運営は、京都出身の吏僚が中心を担い、東国の在地領主の関与は限定的であった(岩田二〇〇六)。「吾妻鏡」元暦元年(一一八四)六月一日条に名前の挙がっている御家人、すなわち「馴京都之輩」たちはいずれも、本人かその一族が泰時執権期の評定衆に名を連ねて幕府運営の中枢を担うようになる。幕府運営の中心を担っていたのは「馴京都之輩」であった。本稿で取り上げた京都から鎌倉に集う人びとは、平家政権にも有力武士・能吏として仕えており、また後白河院や後鳥羽院周辺の人脈を有していた。彼らは関東に勃興した頼朝の勢力と後白河院が接近し、さまざまな交流を持つ上で一定の役割が期待されたとみられる。中世社会ではさまざまな主に仕える兼参(けんさん)は珍しくないが、平家に仕えたという過去も大きな瑕疵とはみなされず、所縁の能吏を積極的に起用するという姿勢が、公武両政権に共通していたようである。

貴族社会の中心が後白河院とその周辺の人々から、後鳥羽院とその周辺に移っていくと、幕府御家人の構成にもその影響が及ぶこととなる。また、幕府草創期を支えた吏僚に代わる人材の確保も課題であったとみられる。このような経緯で、源仲章・源光行らは幕府で起用されるようになったのであろう。

鎌倉幕府は東国に強固な基盤をもつ武士政権として成立したが、当初から後白河―後鳥羽の皇統を戴く朝廷と親和性の高い政権という性格も持っていた。幕府のこのような性格から、棟梁である鎌倉殿(将軍)も治天との関係が重視されることとなる。必然的に、その周辺に集う人々も治天およびその周辺との人脈が重視される。したがって、鎌倉幕府の政治史を規定する棟梁をめぐる争いも、治天を中心とする京都の貴族社会との関係のなかで展開す

るものとなったのである（上横手一九七五）。

後鳥羽院と親密な実朝の死から承久の乱を経て、後鳥羽院とその周辺の人々も逼塞を余儀なくされた。後高倉皇統の擁立をはじめとする朝廷の再編は、幕府の内部にも大きな影響を及ぼしたであろう。

【参考文献】

上横手雅敬 「鎌倉幕府と公家政権」『鎌倉時代政治史研究』一九九一年（初出は一九七五年）

織田百合子 「源光行の鎌倉下向と一時上洛」『解釈』第五八巻第九・一〇号、二〇一二年）

『香川県史 第八巻 資料編古代・中世史料』（香川県、一九八六年）

小松茂美 「右兵衛尉平朝臣重康はいた―「後白河院北面歴名」の出現―」（小松茂美著作集二〇）旺文社、一九九八年（初出は一九八九年）

五味文彦 『増補 吾妻鏡の方法 事実と神話にみる中世』（吉川弘文館、二〇〇〇年）

佐伯智広 「一条能保と鎌倉初期公武関係」『古代文化』五八一、二〇〇六年

野口実 「流人の周辺―源頼朝拳兵再考―」（『中世東国武士団の研究』高科書店、一九九四年（初出は一九八九年）

野中寛文 「讃岐武士団の成立―『綾氏系図』をめぐる―」（『四国中世史研究』一、一九九〇年）

本郷恵子 「院庁務の成立と商工業統制―中世前期における下級官人の動向について―」（『中世公家政権の研究』東京大学出版会、一九九八年（初出は一九八八年）

元木泰雄 「源義朝論」（『古代文化』五四―六、二〇〇二年）

元木泰雄 『平清盛と後白河院』（角川選書、二〇一二年）

岩田慎平 「草創期鎌倉幕府研究の一視点―奉行人を中心に―」〔紫苑〕四、二〇〇六年

岩田慎平 「小鹿島橘氏の治承・寿永内乱―鎌倉幕府成立史に寄せて―」〔紫苑〕八、二〇一〇年

岩田慎平 「頼家・実朝期における京下の鎌倉幕府吏僚―源仲章・源光行を中心に―」〔紫苑〕(二二、二〇一四年)

〈キーワード〉

公武関係 馴京都之輩 鎌倉幕府の組織運営